

2003年10月、パリで「中国文
化年」が開幕した。三つのテ

マ「歴史の中国」「多彩な中国」「現代
の中国」を柱に、さまざまなプログラ
ムが組まれた。

「歴史の中国」をアピールするため
に「三星堆文物展」や「康熙展」などが
開催された。三星堆文物展では96点の
文物が展示されたが、これらは兵馬備
など以前から世界に知られているもの
ではなく、1986年に四川省成都近
郊の広漢市三星堆で、2001年に成
都の金沙でと、比較的最近に発掘され
た文物である。康熙展のほうは、中国
清王朝最盛期の皇帝である康熙の執政
期の政務、宮廷生活、科学知識、陶磁
器、絵画の5テーマで構成されていた。

パリでの「中国文化年」大盛況 ◆

「中国文化年」のテーマのうち、「多
彩な中国」では中国の多様性が存分に
表現された。中国南通の風が展たべられ、
地方の演劇として北方の評劇、南方の
越劇が上演され、雲南の少数民族の衣
装によるファッション展や、中国中央
民族楽団による民族音楽コンサートも
開かれた。

「現代の中国」のテーマに沿ったプロ

グラムも、「20世紀中国絵画展」「当代
中国生活芸術展」、中国バレエ団によ
る現代バレエ、モダンなファッション
ショーなど、多彩であった。ヨーロッパ
パ発の芸術に中国らしさという新鮮味
を加えて、フレッシュなイメージを打
ち出そうとしていた。

さまざまなイベントの開催と同時に、
中国語教育プログラムも始動し、パリ
の中国文化センターで行なわれている
中国語講座が「中国文化年」のイベン
トと相乗効果を作り出した。

中国・フランス両政府とも、この
「中国文化年」に多大な熱意を注いだ。
パリでの「中国文化年」の開催にあた
って、胡锦涛国家主席はもろろんのこ
と、「中国文化の理解者、中国人民の
古い友人」と中国から賞賛されるシラ
ク大統領も祝賀状を送ったという。開
幕式には、中国から陳至立國務委員、
孫家正文化部長、趙進軍・駐フランス
大使、フランスからも外務大臣や駐中
国大使と、そうそうたるメンバーが参
列した。また今回のイベント規模の大
きさに加え、いままであまり知られな
かった中国を紹介するというプログラ
ム自体の新味も功を奏した。両国政府
の思惑に背くことなく「中国文化年」

は大盛況を呈し、パリで中国フィーバ
ーが巻き起こった。

この熱気がまだ冷めやらない200
4年1月、胡锦涛国家主席がフランス
を訪問した。今年はずいぶん中仏国交
40周年にあたり、友好ムードに包まれ
た胡锦涛の訪仏は、両国の良好な関係
を内外に大きくアピールした。「中国
文化年」の大盛況ぶり、そしてこうし
た文化交流が中国の外交に大いに貢献

中国のパブリック・ ディプロマシーと 対外文化交流

あおやま みる み
青山瑠妙

早稲田大学教育学部助教授

していることから、中国の対外文化交流が注目されるようになった。

◆ 中国の対外文化交流の特徴 ◆

中国の対外文化交流は、フランスとの交流のみならず、かなり前から世界各国に向けて活発に行なわれている。2003年に限ってみても、ドイツで「中国文化祭」を開催、イタリアとは相互に文化センターを設置する政府間協定、オーストリアとは「文化交流に関する執行プロジェクト」を締結した。また、マルタ共和国で建設された中国センターがオープンし、スペインとの「中国スペイン論壇」も始動している。昨年に関連された、こうしたヨーロッパの他の諸国との文化交流は、フランスとの交流に比べて規模が比較的小さかったこともあって、さほど世間から注目されなかっただけである。

改革開放を契機にスタートした中国の対外文化交流は、その当初から現在に至るまで一貫して世界各国で「中国文化週」を設け、展覧会を開き、文化芸術団体や留学生を相互に派遣するといった、伝統的な文化外交の手法を採用している。ただ、中国の対外開放が進行していくなかで、交流の方向性に

おける比重は、国内での外国文化の紹介から海外に向けて中国文化を発信する方向へと移ってきている。なかでもヨーロッパとの文化交流は、対日、対米など他地域との文化交流とは異なり、政府間で「文化協力協定」や「文化協定執行計画」を締結し、これらに基づいて行なうという伝統的な枠組みがある。特に1990年代に入ってから、文化交流センターを相互に設立し、そこを拠点に活動を展開するパターンが定着しつつある。

パリの「中国文化年」は2001年に中仏間で調印された文化協力に関する取り決めに基づいたもので、今年秋には中国の主要都市で「フランス文化年」が開催される予定だ。つまり政府主導型で相互主義を採用しているのが、中国の対外文化交流の大きな特徴となっているのである。

◆ マイナスイメージの払拭へ ◆

1989年の天安門事件後、中国は自国を取り巻く国際環境に対して厳しい認識を持つようになり、対外広報を強化し、望ましい国家イメージづくり に本格的に乗り出した。その国家イメージは「温和堅定（温和でありながら動

揺はしない）」であり、最近キャッチフレーズとして明確に打ち出されている。「平和的台頭」「平和的發展」である。

情報の提供や文化交流を通じて他国の国民に直接働きかけ、自国にとって望ましい国際環境を作り出す「パブリック・ディプロマシー」は、東西冷戦終焉後に英米など先進国が特に力を入れてきた外交分野である。しかし、中国のパブリック・ディプロマシーの主目的は米英に比べて、より限定されたものであり、中国のマイナスイメージの払拭——中国政府の言葉を借りれば「世界に中国を説明することにある。つまり、世界に対して中国の政策や発展ぶりを説明し、中国の歴史を説明し、国際世論で取りざたされる「中国問題」について説明し、中国に対する攻撃に反撃するものである。

対米批判論を主題とする『ノーと言える中国』フィーバーが起きた翌年の1997年に、アメリカから帰国した現清華大学教授・李希光の編著『妖怪化された中国の裏に』が中国で出版され、ベストセラーとなった。同書は、アメリカに希望を抱いていた著者らの失望感を示し、アメリカのメディアが描いた「醜悪で妖怪のような中国」像



あおやま るみ ●早稲田大学教育学部助教授、現代中国総合研究所研究員／専門は現代中国外交。主な論文に「二つの空間で形成される中国の対日世論——求められる日本のパブリック外交」「マルチ・メディア時代の中国外交」ほか

がアメリカの一般大衆に植え付けられた、と論じた。

西側のメディアが中国を妖怪化し公平性を欠いた報道を行なっているというイメージは、中国では現在でもなお根強い。西側メディアのこうした対中国報道姿勢について、中国政府関係者は次のような比喻を用いて説明している。「北京市に美しい花壇7カ所、ゴミ箱3カ所があるとすれば、西側メディアは7分でゴミ箱の映像、3分で花壇の映像を流す。その結果、ゴミ都市としての北京というイメージを視聴者に与えている」。また、毎年6月4日にCNNなど大手メディアによって繰り返し流される映像は、天安門事件で戦車の前に立ちはだかった若者の姿である。「戦車の威力で民主化を押し

しつぷそうとする中国の国家権力」というイメージが繰り返し伝えられ、これが非民主主義的な中国像を作り出している。

西側のメディアが世界へ発信している中国のイメージに対するカウンターアタックとして、こうしたイメージを払拭させるパブリック・ディプロマシーが登場したわけである。中国のパブリック・ディプロマシーには、広報体制の強化による対外発信の増強と、パリの「中国文化年」に象徴される伝統的な手法を用いる対外文化交流の、二つの柱がある。中国政府はメディアの海外進出を図り、対外発信力を増強するよう努めているが、西側の巨大メディアに比べ、中国メディアの国際的影響力は依然として小さい。こうした状

況のなかで、伝統的な手法を用いる対外文化交流プログラムは、中国にとつきわめて重要な手段となっている。

外交・ビジネスにもメリット◆

中国がパブリック・ディプロマシーを行なう契機となったのは、天安門事件と東西冷戦の終焉である。旧ソ連と東欧旧社会主義国家が民主化した現在、社会主義国家を標榜している中国は、内なる変化を促進する英米のパブリック・ディプロマシーの重要な対象国の一つとなっている。英米のこうした動きへの対応措置として、そして西側マスメディアによって作り出された中国イメージを「修正」するために、中国はパブリック・ディプロマシーに対する取り組みを強化している。このため、外交手段としての対外文化交流への期待も高まる一方である。

対外文化交流のメリットは、自国文化の発展そのものを促進し、外交にプラスの影響を及ぼすだけでなく、商業的にも巨大な利益が見込まれることにある、と中国の学者は指摘する。中国の対外文化交流が今後、中国の文化、外交、ビジネスにどのような効果をもたらすか、注目される。



『ノーと言える中国』中国語原本。著者は宋強、張威蔵、喬辺ら。日本語翻訳版は新潮文庫から出ている